

宮衛生会篇の三焦とその後

日本内経医学会研究発表

林 孝信

2010年1月10日

前回の発表「三焦の原義と構造」

- 三焦**a** : 締める・しぼる意味を持つ泌尿器
拡がる意味の膀胱と対をなす
- 三焦**b** : 営衛生会篇の上・中・下焦
三焦**a** は下焦に名称を変更

営衛生会篇以前の生理学

- 水穀が胃で消化され精（清）と濁になり、さまざまな気に変化して皮毛や脈や蔵府に行く。

（S21経脈別論 第二段）

この清濁が、後に営衛の概念に発展した

食氣入胃、散精於肝、淫氣於筋。

食氣入胃、濁氣歸心、淫精於脉。

脉氣流經、經氣歸於肺。

肺朝百脉、輸精於皮毛。

毛脉合精、行氣於府。

府精神明、留於四臟、氣歸於權衡。

權衡以平、氣口成寸、以決死生。

飲入於胃、遊溢精氣、上輸於脾。

脾氣散精、上歸於肺。通調水道、下輸膀胱。

水精四布、五經並行。

合於四時五臟、陰陽揆度、以爲常也。

営と衛

以師兵爲營衛。 (『史記』五帝本紀)

士官は陣営にいて、兵卒は周辺を防衛する。

営はたいまつで取り囲んだ建物。衛は外を
巡回すること。ともに循環する意味を含む。

軍事用語であった営衛を、医学に転用した。

「焦」の意味

- こげる

胃脹者、腹滿、胃脘痛、鼻聞**焦臭**、妨于食。 L35

- かわく

不逆則上下不通、不通則面黒、**皮毛焦**。 S16

注之則胃中竭、竭則**咽路焦**。 L63

- やつれる

五七陽明脉衰、**面始焦**、髮始墮。 S01

九十歳、**腎氣焦**、四藏經脉空虚。 L54

これらは皮膚・毛髪・顔などの体表面に関わる

三焦bの創作と営衛生会篇の成立

- 営衛がどこで生成されるかを説明するとき、衛気が皮膚・分肉之間をめぐることと、焦が皮毛・腠理の乾燥ややつれることのイメージが重なったのだろう。もともと「三焦a」と「焦」は異なるものであるが、営衛の発生するところを二つの焦（上焦と中焦）とし、もとの三焦aを下焦としたのである。

その後の三焦

その後、三焦は経脈篇にみられるように、十二経中の蔵府として位置付けられるようになる。

ただ経脈・経別・経筋いずれの篇にも、その所属する経の病証は記載されてるが、蔵府としての病証がほとんどない。そして経脈篇には十二の所生病をあげられているが、その主る蔵府は肺脾心腎肝の五蔵だけであって、他の七項目には津液や血や筋など組織が配当されている。

つまり十二経は十二蔵府の病証すべてに関わるわけではなく、単に十二経に十二蔵府の名前が冠してあるだけにすぎない。

三焦についても蔵府としての病証はなく、手少陽の病証しかない。つまり蔵府の機能が不明確であるため、後に実体の存在も疑われるようになるのである。『難経』で三焦のことを有名無形というのがそれである。

このように三焦には、①膀胱と対をなす泌尿器、②営衛の気を生成する上焦・中焦と下焦、③機能のない名称だけの蔵府、と変遷していった過程をたどることができる。